

iTesting チャンネルによる HIV 検査体制の構築と確立のための研究

研究分担者：吉田理加（愛知県立大学外国語学部）

研究要旨

本研究は様々な異なる形態の HIV 検査を実践するための基礎資料（マニュアル）を作成することを目的としている。研究分担者が属するアウトリーチンググループでは、外国人など多様な人々のコミュニティにアウトリーチをする方法を模索した。例えば、外国人コミュニティへのアウトリーチのため iTesting@Nagoya ウェブサイトと予約サイト、そして検査通知サイトを昨年に続き多言語化し、やさしい日本語を追加して合計 8 言語に対応するようにした。また言語別広報カード、検査会告知ポスター（多言語）、多言語広報のために開設した SNS の多言語での運用、HIV と iTesting 検査会の啓発動画多言語字幕版などの継続的なアウトリーチの方法を模索した。アウトリーチの方法については、翻訳言語のコミュニティが性感染症防止のターゲットとみなされないような配慮が必要であることも明らかになった。また、機械翻訳を利用する際には、事前の日本語原文を整える手間をかけることが有益であることもわかった。さらには、翻訳の正確性や適切さを判断するために ChatGPT などの大規模言語モデルを利用する方法を検証中である。

A. 研究目的

本研究は、現行の HIV 検査体制に加えて様々な HIV 検査を実践し、より受検者にとっても医療従事者にとっても受検/施行可能な検査の導入を進めるための基礎資料（マニュアル）を作成することを目的とする。その中で、外国人や学生、LGBTQ など多様なコミュニティへのアウトリーチのよりよい実践方法を考察する。

B. 研究方法

アウトリーチ活動として、iTesting@Nagoya の HIV 検査の重要性を説明した啓発資料の作成および設置、検査の広報（SNS での発信・動画配信・多言語対応）、検査を評価するためのアンケートの作成、解析、検査施行可能な場の模索、各コミュニティでの啓発活動、多言語対応した iTesting@Nagoya ウェブサイトの作成を行った。

iTesting@Nagoya ウェブサイトと予約サイトの多言語化を行うにあたり、令和 4 年度は日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語とベトナム語で作成した。令和 5 年度は、さらに中国語とインドネシア語を追加した。令和 6 年度は、やさしい日本語を加え、合計 8 言語で展開した。さらに、多言語広報カード、HIV と iTesting@Nagoya に関する啓発動画（多言語字幕付き）に加えて、検査会ごとの多言語ポスターや啓発動画を紹介する多言語ポスターを作成し、国際交流協会、外国に繋がる団体、日本語学校、大学などに配布ならびに SNS での多言語広報をした。さらには、試験会場で多言語

表示を実施した。

多言語化のためにどの言語への翻訳を実施するかに関しては、名古屋医療センターにおけるよく用いられた通訳言語と愛知県と名古屋市の外国人住民の人口比を考慮に入れて決定した。多くの言語に翻訳すること、並びに何語に翻訳するかは決定は、特定の言語コミュニティに iTesting@Nagoya 検査会で扱っている性感染症の負のイメージを結び付けた偏見を生じさせないためにも重要である。

多言語化するために翻訳言語を増やすと、各言語の翻訳内容が正確で、適切であるかを確認し、把握することが難しくなる。そこで、令和 4 - 5 年度はニューラル機械翻訳（DeepL など）を用いて外国語訳を日本語に逆翻訳し、正確性を確認した。令和 6 年度は ChatGPT などの大規模言語モデルを使用して、複数の翻訳候補文の文法的正確性、流暢性、そして、HIV 検査会という文脈に適切な訳文となっているかを検証する方法を考察した。

検査結果通知サイトに関しては、システムの都合上、人間の翻訳者が行った翻訳を用いることができず、機械翻訳（Google）を用いざるを得なかった。そこで、正確性に劣る日本語からベトナム語への翻訳が他の言語ペアに比べて翻訳精度が低い状況があるため、検査結果通知並びに結果通知に先立って行われるアンケート調査で、誤った翻訳によって誤った結果・情報が通知されないように、起点テキスト（原文の日本語テキスト）の「前編集（プリエディッ

ト)」を実施し、サイト提供会社の協力を得ながら、機械翻訳であれども大きな誤訳が生じないように最大限の工夫を施した。

(倫理面への配慮)

検査は、予約からすべて匿名検査で行っている。またアンケート調査も匿名で行い、名古屋市立大学の倫理審査を受審の上実施している。

C.研究結果

令和4年から5年度は、ウェブサイトと予約サイトの翻訳の手順としては、人間の翻訳者が翻訳した後、分担研究者が理解できる言語（スペイン語）以外は、機械翻訳を用いて逆翻訳をした。それを起点テキスト（ST）と見比べ、時制、主語、名詞などに齟齬がみられた箇所や訳抜けや余剰と思われる箇所を翻訳者に再検討を依頼した。このような逆翻訳の工程を入れることで、確実に正確な翻訳であることを担保するシステムが構築できた。令和6年度に関しては、機械翻訳はChatGptを利用し、正確性に加えて適切性の検証を進めている。

また、結果通知サイトは、システム全体に関わるため、機械翻訳を使用することになった。機械翻訳の精度を上げるために、原文の日本語に「前編集」と呼ばれる工程を設け、誤訳が表れにくくなるようにした。

多言語ウェブサイトで検査の重要性を説明した多言語スライドの作成を継続できた。また、啓発動画にアクセスを促すためのポスターや多言語チラシも作成し、SNSを活用した多言語アウトリーチ活動も、ゲイコミュニティへの性感染症啓発団体と連携し実施した。多言語翻訳多言語サイトから毎回の検査会において一定の数の予約がなされたことをみて、ある程度のアウトリーチの目的は達成されたと考えられる。

D.考察

性感染症検査会のアウトリーチは、多言語コミュニティによっては偏見が根強く、日本語コミュニティも含んだ多言語コミュニティへのアウトリーチであることを明確に打ち出すことが必要である。さもないければ、特定の言語のコミュニティが、社会の中で、性感染症などの病気をもたらす存在としてみなされているのではないかと捉えられてしまう危険があり、アウトリーチ活動においては、日本語を含む多言語アプローチが有効であることもわかった。

実際に SNS で多言語広報カードをエスニックニュースメディアに掲載してもらった際に、その SNS のコメント欄には、以下のような中傷とも考えられるコメントが寄せられた。

表 コメント例

多くの日本人は HIV やその他の病気は外国人だけの問題だと思っている。
（検査会）は不潔な人たちのためのものさ（笑）
不潔なやつらはどんな虫けらにでも手を出して感染するっていうのは事実なんだよ
税金からではなく、彼らのポケットから払わせろ。

このようなコメントの他に、性感染症の無料検査会を、健康促進の機会として好意的に受け止める書き込みも見られた。しかし、匿名ではなく実名であからさまに批判を展開する上の表に例示したようなコメントが複数あった。換言すると、HIV などの性感染症検査会に対して否定的で偏見に基づいた差別的な行動がとられる傾向も垣間見られた。

そして、機械翻訳の精度をあげるために有効であることがわかった日本語原文の前編集について考察する。

機械翻訳を利用する際、日本語の原文の次の6つの基準を念頭に「前編集」を行うと英語への翻訳精度が改善することがこれまでの研究で明らかにされている。6つの基準とは、1. 文を短くすること、2. 主語を必ず入れること、3. 多義語の使用を控える、4. 名詞の単数・複数を明示的に示す、5. 限定する言葉（例、この、その、あの）を名詞の前におく、6. 固有名詞のスペルを確認する、である。

この「前編集」の手順は以下のように行った。まず、起点テキストを該当の外国語に機械翻訳し、英語、スペイン語、ポルトガル語は研究分担者が、ベトナム語は翻訳者が訳文を日本語に逆翻訳した。その上で、誤った訳が問題となりそうな箇所を抽出した。問題となり「前編集」を行った主な日本語表現と機械翻訳並びに修正は以下の表のとおりである。

表

原文（起点テキスト）	機械翻訳による目標テキスト（日本語で示したもの）	原文修正（前編集）
全ての言語に共通		
1) 自分が	「君が」	私が
2) コミュニティセンター rise	「コミュニティセンター増加」	rise をバナー画像にして機械翻訳されないようにした
3) （経験が） ない・ある	（存在が）「ない・ある」	いいえ、ありません/はい、

		あります
ベトナム語		
4) 自宅検査	「住宅検査」	自宅で検査
5) 採取日	「集金日」	採血日
6) 携帯の出会い系サイト	「可動式の出会い系サイト」	携帯電話の出会い系サイト

まず、起点言語と機械翻訳による目標言語を比べ、異なる意味になっている箇所に着目し、機械翻訳によって等価な目標言語となることを確認した上で、起点言語を修正するという「前編集」を実施した。riseのような固有名詞の場合は、機械翻訳のシステムにあらかじめ固有名詞として登録しておくことによって、自動的に訳されることを回避した。さて、「前編集」にかかる具体的な語彙・表現のいくつかを上表に記載して示した。1)から3)は全ての言語への機械翻訳で前編集が必要となった。4)から6)はベトナム語への機械翻訳で必要となった。このことから、機械翻訳と一言で言っても、何語への翻訳かによって訳の精度がかなり異なること、前編集という原文を修正・編集する工程を踏むことで、より精度の高い機械翻訳を提供できることが明らかになった。

また、令和6年度から導入した「やさしい日本語」は、希少言語話者で該当言語の翻訳は提供できなくても、日本に暮らす人々であれば「やさしい日本語」は理解している可能性が高く、アウトリーチできる対象が飛躍的に伸びる効果があると考えられる。しかし、病名などの専門用語を「やさしい日本語」にすることは難しく、英語訳に頼らなければならない場合もあり、限界があることも分かった。

また、実際の外国語話者の検査会の予約並びに受検であるが、予約開始後数日で、ときは予約開始当日に300名の定員が埋まってしまう状況があった。しかし、回を重ねるごとに毎回10数名程度が多言語ホームページから予約をしており、多言語コミュニティを含む幅広い層にアプローチが可能になっていると思われる。

E. 結論

HIVの正しい情報を多言語コミュニティに広く啓発することは健康の維持・向上という社会的意義がある。さらには、アウトリーチングの手法を理論・実践的に構築することには学術的・国際的意義がある。上述の通り、ある程度が多言語ならびに多様な層へのアウトリーチは一定程度達成されたと思われるため、そのノウハウを継承するために情報をホームページ

にまとめている。具体的には、検査の多言語化を行うための方法として、翻訳のコツ、広報の仕方、やさしい日本語のコツを説明し、多言語化した素材をそろえて公開する準備をしている。

F. 研究発表

1. 論文発表

- Yoshida, R. & Itoigawa, M. (2023). Nuevos retos y responsabilidades de una universidad en los estudios de TISP en Japón. In Valero, C. (Ed.). E-Book TISP en Transición / PSIT in Transition. Publicaciones de la Universidad. DOI: <https://doi.org/10.37536/VISG5657>

〈研究ノート〉

- 松下佳世・古川典代・吉田理加 (2022). 「多言語通訳コーパスを活用した日英・日中・日西の訳出比較」『通訳翻訳研究』第22号

〈実践報告〉

- 吉田理加・小池康弘・糸魚川美樹 (2024). 「「UNHCR 難民映画祭パートナーズ上映」と動画講演におけるコミュニティ通訳実習実施報告」『共生の文化研究』第18号.
- 吉田理加・小池康弘・糸魚川美樹 (2024). 「「コミュニティ通訳学と多言語防災の取り組み」『共生の文化研究』第18号.

2. 学会発表

国内

- 武田珂代子・辛島デイヴィッド・宮田玲・山田優・吉田理加 「日本におけるトランスレーション・ポリシー研究の始め」 日本通訳翻訳学会第33回年次大会（オンライン） 2022年9月
- 松下佳世・古川典代・吉田理加 「多言語通訳コーパスを活用した日英・日中・日西の訳出比較に基づく初期的考察」 日本通訳翻訳学会第33回年次大会（オンライン） 2022年9月
- 飯田奈美子・斎藤美野・坪井睦子・蓮池通子・水野真木子・吉田理加 「通訳翻訳研究におけるデータセッションの有効性の検討」 日本通訳翻訳学会第33回年次大会（オンライン） 2022年9月
- 武田珂代子・辛島デイヴィッド・宮田玲・嶋津美和子・吉田理加 「日本におけるトランスレーションポリシー」プロジェクトの活動報告 日本通訳翻訳学会第24回年

- 次大会（関西大学） 2023 年 9 月 2 日
5. 吉田理加・今橋真弓・金子典代 「無料匿名性感染症検査会 iTesting@Nagoya における多言語アウトリーチ実践報告：「プリエディット（前編集）の工程に着目して」日本通訳翻訳学会第 24 回年次大会（関西大学） 2023 年 9 月 3 日
 6. 飯田奈美子・斎藤美野・坪井睦子・蓮池通子・水野真木子・吉田理加 「ドキュメンタリー作品『ナディアの誓い』の通訳翻訳学的分析：データセッションでの考察から」 日本通訳翻訳学会第 24 回年次大会（関西大学） 2023 年 9 月 2 日
 7. Yoshida, R. Cómo traducen los intérpretes los enunciados discriminatorios: Análisis narrativo de los estrategias pragmáticas de interpretación. CANELA 35th Annual Congress (Nanzan University) May 28, 2023,
 8. 吉田理加・糸魚川美樹 (2024. 9. 7) 「大学院コミュニティ通訳学コースの取り組み：「顕在的機能」と「潜在的機能」からの考察」日本通訳翻訳学会 第 25 回年次大会（神戸大学）2024 年 9 月
 9. 道上史絵・村上智里・吉田理加 (2024. 9. 7) 「日本の捜査通訳制度の問題に関するケーススタディ：フィリピン（タガログ）語誤訳事件を事例として」日本通訳翻訳学会 第 25 回年次大会（神戸大学）2024 年 9 月
 10. 吉田理加 (2024. 12. 12) 「司法通訳における通訳人の中立性と倫理規定」愛知県立大学・RMIT 大学連携国際シンポジウム 社会インフラとしての コミュニティ通訳制度構築検討に向けて： 大学と自治体の国際連携 （愛知県立大学）

国外

1. Yoshida, R. Multilingual communication and disaster preparedness/responses in Japan. Nov. 16, 2023. *Roundtable on multilingual approaches to disaster preparedness* (RMIT University).
2. Yoshida, R. Trust in community interpreting in Japan: Towards a greater role for language professionals. Nov. 16, 2023. *Global Multicultural Communication Lecture Series* (RMIT University).
3. Yoshida, R., How "trust" is constructed and expressed in the narratives regarding the role of community interpreters. In the Panel *How Japanese central and local governments view the needs for interpreting services and the role of interpreters in their administrative undertakings* (by Takeda, K., Marszalenko, J., Inagaki, H., & Yoshida, R.) Aug. 18, 2023,

European Association of Japanese Studies 2023 (Online).

4. Yoshida, R. (2024.11.23) Constructing 'Trust' in Legal and Medical Interpreting in Australia and Japan: A Narrative Analysis. 37th AUSIT National Conference (RMIT University)
5. Yoshida, R. (2025.02.13). Dilemas y encantos de traducir e interpretar entre español y japonés （日西通訳翻訳のジレンマと魅力）バルセロナ自治大学翻訳通訳学部招待講演（バルセロナ自治大学）

G.知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

- 1.特許取得
なし
- 2.実用新案登録
なし
- 3.その他